

2年2組 体育科科学習指導案

授業日 平成25年6月26日(水) 3校時
授業者 附属新潟小学校 教諭 山形 昭
会場 体育館

1 単元名 「カポカポぼっくりで空中さんぽに出かけよう」 ＜A 体づくり運動 イ 多様な動きをつくる運動遊び ～用具を操作する運動遊び・体を移動する運動遊び～＞

2 本単元の価値

本単元は、学習指導要領の第1学年及び第2学年の2内容のA体づくり運動に、次のように示されている。

運動

(1) 次の運動を行い、体を動かす楽しさや心地よさを味わうとともに、体の基本的な動きができるようにする。

イ 多様な動きをつくる運動遊びでは、体のバランスをとったり移動をしたりするとともに、用具の操作などをすること。

態度

(2) 運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、場の安全に気を付けたりすることができるようにする。

思考・判断

(3) 体づくりのための簡単な運動の行い方を工夫できるようにする。

ア 体を動かすと気持ちが良いことに気付き、友達と一緒に運動をしたり用具を使って運動したりするなど、楽しく運動できる行い方を選ぶこと。

イ 多様な動きをつくる運動遊びの行い方を知り、友達のよい動きを見付けること。

本単元では、多様な動きをつくる運動遊びの(ウ)用具を操作する運動遊びを取り上げ、その中でも「用具に乗るなどの動き」に重点を置く。さらに、(イ)体を移動する運動遊びにおける、いろいろな方向に歩く、走るなどの動きも取り入れて単元を構成し、体の基本的な動きを身に付けさせる。

「用具に乗るなどの動き」に重点を置いた理由は、以下の3点である。1点目は、子どもの発達段階において、低学年は特にバランス感覚を養うことに適した時期であることである。2点目は、同じく発育発達の観点から手と足の協応運動を行うのに適していることである。3点目は、それにもかかわらず、学校現場において、竹馬や一輪車などの運動は、体育授業であまり取り上げられず、行間休みに子どもが自由にやるだけに止まっているということである。そのため、積極的にその運動を行う子どももいれば、全く行わないという子どもも出てしまう。幼児期に自転車に乗れる子どもは、大人になっても自転車に乗れることと同じように、低学年の内に「用具に乗るなどの動き」を身に付けることはとても重要である。

さらに、本単元では、動きを身に付けるための「動きの秘訣」を、自分の課題と照らし合わせて選択する力を身に付けさせる。それにより、子どもは、他の運動場面でも自分で運動の課題を解決しようという態度が養われ、生涯にわたって運動に親しむことにつながっていくのである。

3 本単元で目指す姿と学びをつなぐ場面、「考えるすべ」

本単元で目指す子どもの姿は、自分の課題を解決するための動きの秘訣が**分かり、用具に乗る動きを身に付けることができる子ども**である。具体的には、自分の運動課題を解決する方法を、友達の動きや友達の課題解決方法(動きの秘訣)から見出すことができ、段差や方向などを変えた様々な場において、カポカポぼっくり(右図)に乗って動くことができる子どもである。カポカポぼっくりとは、拡大機のマスターの芯を長さ10cmから15cmに切り、ビニール紐を付けたものである。この動きを扱う理由は、①文部科学省から出された「多様な動きをつくる運動(遊び)パンフレット」においても、多様な動きの工夫例として紹介されていること、②すべての子どもに一人一つずつの用具が確保できること、③カポカポぼっくりの高さを容易に調節することができることの3点である。



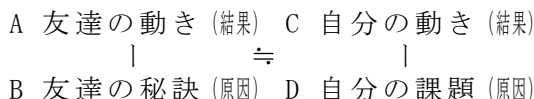
目指す姿にするためには、図1のように、自分の目指す動き(C)とそれに向かうための自分の課題(D)とのつながりを、目指す動きを身に付けている友達の動き(A)と友達の

動きの秘訣(B)とのつながりから関係付けることが必要である。そのために、動きを身に付けている友達の動きと自分の現在の動きの共通点や相違点を分類させる。ここでの「動き」とは、動かす部位や動きのタイミング、動かし方のことである。すると子どもは、相違点に自分の課題や動きの秘訣があるのではないかと気付いていく。

その後、見つけた自分の課題を解決できそうな動きの秘訣を実際に運動して確かめさせる。すると子どもは、「**動きを身に付けた友達の秘訣(B)を自分の課題(D)に取り入れれば、動きを身に付けた友達(A)のように自分も動きを身に付ける(C)ことができるのではないか**」と課題を解決するための見通しをもつ。これが、本單元における学びをつなぐ場面である。学びをつなげて、平らな床でカポカポぼっくりに乗れるまでの場面を活用対象とし、本研究では、活用場面を研究対象とする。

その後、上記のように見通しをもつことができた子どもは、組織化の場面において様々な場で運動を行うことにより、用具に乗る動きを身に付けることへと発展し、目指す姿となる。

【図1：構造的ー貫性】



4 指導計画 全5時間(15Q)

《学習活動》

《働き掛け》

- ・カポカポぼっくりに乗り、平らな床で歩く動きを行う。
- ・いすに座って(もしくは壁に寄り添いながら)カポカポぼっくりに足を上げ、そこから立ち上がるなどの乗り方を知る。
- ・低いカポカポぼっくりにできたら別の視点を与える。
- ・動きのカルテを付ける。[1時間]

- 「カポカポぼっくりに乗って、空中さんぽに出かけよう」という運動課題を設定し、体育館のフロア(平らな床)でかんぼっくりに乗って歩く動きを行わせる。
【問いを生むための働き掛け】
- 自分がどのように動いているかを問い、動きのカルテを付けさせる。
【働き掛け1】

- ・友達とグループを組み、動きのカルテを見せ合う。共通点や相違点を分類することで自分の課題や動きを身に付けるための秘訣を考えて付箋に記述する。
- ・自分の課題にあった動きの秘訣を選んだり教えてもらったりしながら実際に試し、カポカポぼっくりに乗ることができる。
- ・自分ができそうな理由を考える。
[本時・1時間]

- カポカポぼっくりに乗れた子どもとそうでない子どもとでグループを組み、両者の動きのカルテを比較させ、できない原因を問う。
【働き掛け2】
- カポカポぼっくりに乗れた友達の動きの秘訣を教わったり選んだりしながら運動を行わせ、課題を解決した理由を問う。
【働き掛け3】

- ・山越えコース、ジグザグコース、細道コース、フカフカコースを試してみる。
- ・動きのカルテを付ける。
- ・できた子どもとできない子どもでグループを組み、動きのカルテを見ながら共通点や相違点を比較させる。
- ・動きの秘訣を教え合ったり、掲示してあるものから選んだりしながら、実際に試してみる。
[3時間]

- 動きの工夫の観点を変えた場で運動させることで、自分ができるコースとできないコースを把握させる。
- 自分がどのように動いているかを問い、各コースにおける動きのカルテを付けさせる。
- 各コースにおいて、動きができる子どもとそうでない子どもとグループを組み、両者の動きのカルテを比較させる。
- 動きができた友達の動きの秘訣を教わったり選んだりしながら運動を行わせる。

5 指導の構想

「カポカポぼっくりで空中さんぽに出かけよう」というストーリーを設定し、子どもにカポカポぼっくりに乗る動きを行わせる。まずは、「動きを確認しながら運動する時間」として、体育館のフロア（平らな床）を前に歩く動きを行わせる。すると、カポカポぼっくりに乗れた子どもと、そうでない子どもが現れる。そこで、乗れた子どもの学習意欲を持続させるために、速く歩く子どもの姿を見せたり、高さの高いものを提示したりする。乗れた子どもは「もっと高いカポカポぼっくりにも乗れるようになりたい」「もっと速く動けるようになりたい」と考える。また、乗れない子どもは、「カポカポぼっくりに乗れるようになりたい」と考える。また、このように、意欲を高めている状態を問いつつた姿とする。

カポカポぼっくりに乗る動きを高めたいと思った子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

自分がどのように動いているかを問い、動きのカルテを付けさせる。

「もっとうまくになりたい」と考えている子どもに、「どうしてうまくできないのかな。自分はどのように動いているのでしょうか」と問い、「動きのカルテ（図2）」を付けさせる。動きのカルテを付けるのは、動きができなかった子どもには、自分の課題を把握させ、できた子どもには動きの秘訣を考えさせるための資料にさせるためである。また、カルテを付ける際に自分で判断しにくいところは友達同士で見合っ付けて付けるようにさせる。

この働き掛けによって、自分で判断したり友達に見てもらったりして動きのカルテに丸を付けたり記述したりした子どもを、動きを自覚したと見なす。ただし、2年生という発達段階を考慮し、自分の動きについて見直してみた、意識してみたという姿を自覚したととらえる。そのような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け2

動きがうまくできた子どもとそうでない子どもとでグループを組み、両者の動きのカルテを比較させ、うまくできない原因を問う。

「自分の動きは〇〇のようになっている。これでいいのかな」と考えている子どもに、自分の動きと友達の動きを比較させる働き掛けを行う。問いの状態から子どもは、①カポカポぼっくりに乗りたい、②もっと高いカポカポぼっくりに乗りたい、③カポカポぼっくりに乗って、もっと速く動く動きたい、④高いカポカポぼっくりで速く動きたいの4つの思いが出ると思われる。そこで、その思いを基に動きがうまくできた子どもとそうでない子どもとでグループを組ませる。

そして、そのグループの中で自分が付けた動きのカルテを見せ合いながら、共通点や相違点を分類させる。すると子どもは、動きがうまくできた子どもとそうでない子どもの動きのカルテの丸の位置が違うことに気付く。または、丸の位置が同じであっても、記述された動きのタイミングや動き方などのところに違いがあることに気付く。

相違点に気付いた子どもに、動きがうまくできない原因を問う。すると子どもは、相違点にできない原因があるのではないかと、自分の課題や動きの秘訣に気付き始める。ここで、カポカポぼっくりにうまく乗ることができない子どもには、赤い付箋に自分の課題と思うものを記述させ、動きがうまくできた子どもには、できるための動きの秘訣を青い付箋に記述させる。そして、その青い付箋を動きのカルテで示したカテゴリー（顔、背中、足に位置、重心、タイミング、動かし方など）ごとに分けて模造紙に貼らせ、その模造紙を体育館に掲示する。

働き掛け3

動きができた友達の動きの秘訣を教わったり選んだりしながら運動を行わせ、課題を解決した理由を問う。

相違点にできない原因や動きの秘訣があるのではないかと考え始めた子どもに、その原因を解決させるため、グループで動きの秘訣を教える活動を設定し、その中で運動させる。この時点でできる子どももいれば、できない子どもがいることが予想される。できない場合には、できる子どもとできない子どもで相談させる。相談の視点として、体育館に掲示してある動きの秘訣を読んで、自分の課題を解決するための秘訣を選ばせる。選んだら試しの運動をさせるといふように、繰り返し運動させていく。すると子どもは

図2

<〇〇コース>	下むき	まっすぐまえ	上むき	そのた()
【かお】				
【せなか】	まえかがみ	まっすぐ	うしろにそる	そのた()
【足のいち】	まえ	まん中	うしろ	そのた()
【じゅうしん】 (たいじゅう)	まえ	まん中	うしろ	そのた()

そのた(うごきのタイミング、うごかしかなど)

「動きを身に付けた友達の秘訣を自分の課題に取り入れれば、動きを身に付けた友達のように自分も動きを身に付けることができるのではないか」と関係付けるすべを使って、動きを身に付けるための見通しをもつ。これが、活用場面における学びをつなぐ場面である。様々な自分の課題に合いそうな秘訣を繰り返し確かめて運動することで、動きを身に付けるための見通しをもち、自分の課題を解決していく。

見通しをもった子どもに、課題を解決した理由を問う。すると子どもは、**自分のカポカポぼっくりに乗るための課題と友達から教わったカポカポぼっくりに乗る動きの秘訣**とをつないで、自分の課題を解決することができたことにより、乗れた喜びを実感する。見通しをもつだけでなく、実際に課題を解決できた経験があるからこそ、喜びを子どもは実感し、次への運動課題にも生かしていくのである。

その後、上記のように見通しをもつことができた子どもは、組織化の場面において段差や方向などを変えた様々な場で運動を行うことにより、用具に乗る動きを身に付けることへと発展し、目指す姿となる。

6 本時の構想 2 / 5 時間 (45分授業)

(1) ねらい

- ① 用具を操作する運動遊び「用具（カポカポぼっくり）に乗るなどの動き」を行い、自分の課題に合った動きの秘訣を見付けることで、動きを身に付けるための見通しをもつことができる。
- ② 自分の課題を解決することができる。



(2) 主張（展開） 3 Q (45分)

このような子どもに (C0)

- 低いカポカポぼっくりに乗って前向きに歩く動きを身に付けている子どもとそうでない子どもがいる。
- 低いカポカポぼっくりで前向きに歩けた子どもには、学習意欲を持続させるために、速く歩く子どもの姿を見せたり、高さの高いものを提示したりする。これにより、子どもは学習意欲を失わずに、運動に励む。
- 乗れない子どもは、「カポカポぼっくりに乗れるようになりたい」と考える。また、乗れた子どもは「もっと難易度の高いもの（高いかんぼっくりに乗る、もっと速く動くなど）ができるようになりたい」と考える。
- ※ このように、意欲を高めている状態を問いをもった姿とする。
- ※ 乗れたかどうかは、体育館の壁から紺色のラインテープ（約9.5m）まで移動できたかどうかで判断する。

このように働き掛けると【働き掛け1】

- 自分がどのように動いているかを問い、動きのカルテを付けさせる。
- 発問「どうしてうまくできないのかな。自分はどのように動いているのでしょうか」
- 指示「動きのカルテを付けてみましょう。自分で分かるところは、自分で丸を付けて、自分で見えないところ、分からないところはペアの人に見てもらって付けましょう」
- 指示「ワークシートの下の方にある四角には、動きのタイミングや体のある部分の動かし方などで気付いたことがあれば、それを書きましょう」
- ※ 2年生という発達段階を考えて、書き方が分からない子どもには、分かりやすく説明する。

このようになり (C1)

- 自分の動きを見つめ直したり、友達に自分の動きを評価してもらったりしながら、自分の動きに意識を傾けて動きのカルテを付ける。
 - ・ どうしてうまくできないのか、分からないよ。
 - ・ 自分は、どのように動いているのかな。
 - ・ ぼくは、顔を下向きにして歩いています。でもうまく乗れないんだよな。これでいいのかな。
 - ・ 私の背中ってどうなっているのかな。友達に見てもらおう。
 - ・ 足の位置はカポカポぼっくりが足の真ん中にくるようにしています。その方がうまく乗れるよ。
 - ・ 重心は、ちょっと前だな。その方が前に歩くときは歩きやすいよ。
 - ・ ぼくは、ひもを引っ張って、手と足が同時に動くように気を付けているよ。

このように働き掛けると【働き掛け2】

- 動きができた子どもとそうでない子どもとでグループを組み、両者の動きのカルテを比較させ、うまくできない原因を問う。
- 指示「前回の授業で、自分がどのように動いているのか、動きのカルテを付けてみました。うまくできる人もいれば、そうでない人もいて、本当に自分のカルテは正しいのか疑問に思っている人もいますよね」
- 指示「なぜうまくできないのか、どうすればうまくできるのかを考えるために、グループで動きのカルテを見せ合いながら、同じところと違うところを話し合ってみましょう」
- 指示「グループは、先生が決めたので発表します。それでは集まって、動きのカルテを比べてみましょう」
- 発問「なぜは解けましたか。なぜうまくできないのでしょうか。うまくできなかった人は、うまくできない原因はこれじゃないかという考えを赤い付箋に書きましょう。その動きがうまくできた人は、うまくできない人ができるようになるためにはこれに気を付けたらいいんじゃないかという動きの秘訣（コツ）を、青い付箋に書きましょう」
- ※2年生という実態を考慮し、グループを回りながら、「うまくできた人とうまくできなかった人の動きのカルテの同じところはどこでしたか。違うところはどこでしたか。カルテを比べてみましょう」などと思いを促す発問を行う。
- ※秘訣という言葉の意味が分からなかった場合は、「コツ」などと言い換えて説明する。
- 指示「青い付箋を書き終わった人は、自分の書いた動きの秘訣を種類ごとに分けて大きな紙に貼りましょう。赤い付箋を書き終わった人は、次の指示があるまで自分のたんけんバッグに貼っておきましょう」
- ※青い付箋を「かおについて」「せなかについて」などとカテゴリーごとに分けた模造紙に貼らせる。その後、体育館に掲示する。

このようになり (C2)

- 動きをうまくできた子どもの動きのカルテとそうでない子どもの動きのカルテを見比べて、同じところと違うところを話し合う。
 - ・できた人はみんな、顔を「まっすぐ前」のところに丸を付けているよ。できなかった人は「下むき」に丸が付いている。
 - ・背中では、できた人は「まっすぐ」に丸だ。できなかった人は、「まっすぐ」ではないところに丸が付いているね。
 - ・できた人もできない人も足の位置は「真ん中」に丸が付いていて、同じだ。
 - ・重心はみんな「まえ」に丸が付いていて同じだ。
 - ・ぼく（できなかった人）は、動かし方ってところは分からなかったけど、できた人はひもを引っ張って、手と足を同時に動かすって書いてある。ぼくは気付かなかったな。
- カポカポぽっくりに乗って前向きに歩く動きを身に付けた子どもは、その動きを身に付けるために必要な動きの秘訣を青い付箋に書き、できなかった子どもは、できなかった原因（自分の課題）を赤い付箋に書く。
 - 【青い付箋】
 - ・顔はまっすぐ前を見た方がバランスがとれる。
 - ・背中ではまっすぐにした方がよい。
 - ・足の位置は、かんぽっくりが足の裏のまん中にくるようにするとうまく乗れる。
 - ・重心は、前に歩くなら少し前の方が歩きやすい。
 - ・ひもをしっかりと引っ張って、手と足を同時に動かすようにするとよい。
 - ・リズムよく手足を動かすとよい。
 - 【赤い付箋】
 - ・下ばかり見ていたのが悪いと思う。
 - ・背中を前かがみにしているのがよくないのかな。
 - ・かんぽっくりが、かかとに近いとだめなんだな。
 - ・重心は後ろだと前に歩きにくい。
 - ・ひもをしっかりと引っ張らないといけない。手と足を一緒に動かす。

このように働き掛けると【働き掛け3】

- 動きがうまくできた友達の動きの秘訣を教わったり選んだりしながら運動を行わせ、課題を解決した理由を問う。
- 指示「これがよくなかったからだといううまくできなかった原因やこれに気を付けるとできるかもしれないという動きの秘訣が分かったでしょうか。」

でも、青い付箋に書かれたことに気を付けてやってみると、本当にできるようになるのでしょうか。実際に運動して確かめてみましょう」

指示「確かめてみるとうまくできる場合もあれば、うまくできない場合もありますよね。もしできなかつたら、グループにいるうまくできる人に秘訣（コツ）を教えてもらったり、ここに貼ってある、他の人が見つけた動きの秘訣（コツ）を読んだりしながら、自分に合った動きの秘訣（コツ）を探してみましょう。このように、自分に合っていると思われる秘訣（コツ）を探し、試してみるという活動を繰り返して、運動してみましょう」

※コースを回りながら子どもに「赤い付箋に何て書いたの。青い付箋を読んで自分に合いそうな秘訣（コツ）を探して見たらどう」などと声を掛けていく。

発問「集合。どうでしたか。うまくできるようになりましたか。うまくできるようになった人は、どうしてできるようになったと思いますか。また、うまくできなかった人は、どうしてできなかったと思いますか。その理由を考えてワークシートに書きましょう」

※以下のようなワークシートを配付する。

ぼくの（わたしの）、うまくできなかったげんいんは、

 でした。

ぼくは（わたしは）、自分のめあてが
 できるようになりました。 できるようになりませんでした。
 その理由は、

 （だ）からだと思います。

このようになる（C3）

- 自分のカポカポぼっくりに乗るための課題と友達から教わったカポカポぼっくりに乗る動きの秘訣とをつないで、動きを身に付けるための見通しをもつことができる。また、見通しをもったことで、課題を解決することができる。
- ・ ぼくの（わたしの）、うまくできなかったげんいんは、下ばかり見ていたことでした。ぼく（わたし）は、自分のめあてができるようになりました。その理由は、下ばかり見ないで顔を上げて前を見るというひけつを教えてもらったからだと思います。
 - ・ ぼくの（わたしの）、うまくできなかったげんいんは、背中が前かがみになっていたことでした。ぼく（わたし）は、自分のめあてができるようになりました。その理由は、せなかをまっすぐにした方がいいよと友達に教えてもらったからだと思います。
 - ・ ぼくの（わたしの）、うまくできなかったげんいんは、ひもをしっかりと引っ張っていなかったことでした。ぼく（わたし）は、自分のめあてができるようになりました。その理由は、ひもをしっかりとひっぱって、右手と右足、左手と左足をいっしょにうごかすひけつを青いふせんで読んだからだと思います。

7 検証

(1) 検証すること

- ① 活用の場面で、構想した働き掛けにより、想定した「考えるすべ」を使って、既
有の類似した知識や経験をつなぐことができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、学びをつなぐ力を高めた姿になったか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3において、**関係付けるすべ**を使って、 のような**自分のかんぼ
っくりに乗るための課題を解決するために、 のように**友達から教わったかんぼ
っくりに乗る動きの秘訣**をつなぐことができたかを、ワークシートに書かれた記述
により判断する。また、自分の課題を解決することができたかを、実際の子どもの
動きとワークシートの記述により判断する。**
- ② 組織化の場面において、様々な場で身に付けた動きを行うことにより、動きを身
に付けることができたかどうかを、実際の子どもの動きにより判断する。